英霊の言乃葉

一輪の花

陸軍中尉　加藤　出雲　命
昭和十五年十月十七日
中支・安徽省獅子嶺にて戦死
京都府京都市伏見区新町　二十九歳

一方は畑で他方は傾斜してゐて泥が深い。道は悪い。その畑を通ってゐたのだが、きれいな花が一輪泥の上に美しい顔を見せてゐた。

尖兵の将校がその花をよけて横の泥深い処を迂回して歩いてゐた。花の上を踏んで歩く方が泥も少く近道でもあるのだが、花をふみくだくに忍びなかつたのだ。

次を歩いてゐる男もそれにならって花をよけて通った。次々に兵隊はわざわざ泥の道を遠回りして歩いた。部隊が通りすぎた後にはきれいな花が泥の上に浮んでほのぼのとした美しさを見せてゐた。行軍に疲れた時、実際ぬかるみ道は倍疲れる。そんな時にさへも、たった一輪の花もふまずに通って行った兵隊の心情が嬉しいのだ。

（手紙の一節）

【昭和五十一年八月靖國神社社頭掲示】

社報「うむい」について

沖縄の言葉で「思い、願望、考え、所存」のことを「ウムィー」といい、戦争で亡くなっていった人達の思い、そして残された遺族、戦友達の思いを次の世代へと継承すべくつけられた名前。

日清戦争以後、敢然と国難に立ち向かっていった先人たちの尊い精神が、この「うむい」を通して末代まで受け継がれ、真に戦争の無い平和な世の中になるようにとの願いが込められている。

表紙写真（安田淳夫氏撮影）

目次

英霊達の思い……3
護國神社この一年……4
特　集
　学徒達の沖縄戦……6
　くやみのことば……8
平成十二年度永代祭申込者名……10
今に残る激戦の跡……12
うむい掲示板……16
戦友・遺族からの手紙……17
社務日誌抄……18
編集後記……19

英霊達の思い

先の戦争終結から五十六年目を迎える今年の終戦記念日、小泉首相の参拝問題で注目を集めた靖國神社には、例年以上に大勢の人が参拝に訪れました。

当日、マスコミ各社は参拝する人々にその理由をインタビューしていましたが、そのなかで七十代後半と思しき一人の男性の答えが印象的でした。

それは「今日は、亡くなった戦友に会いに来たのですよ。」という言葉でした。くだんの男性には死んでいった戦友たちが残していった「靖國で会おう」という言葉が、今でも忘れられずに心に残っているのです。その思いがひしひしと感じられる言葉でした。

古来から、わたくし達は亡くなっていった人の魂をいつも身近に感じ、盆、正月そして季節の祭りの際にお迎えし、感謝の念をもって交流してきました。また今でも故人の命日には、あの世で微笑んでくれている身近な人の姿を想像しながら、生前好きだった菓子や煙草等を供え、ねんごろに供養を行なっています。

そして、その魂はある一定の期間や手続きを経ると「神」となり、時を定め子孫の住む世界へと舞い戻り、さまざまな豊穣や幸を人々にもたらし、再び神の世界へと帰っていくと信じられてきました。

しかし、近年亡くなった人や祖先に対する感謝の念を忘れ、目に見える事象にのみ心を奪われ、自分勝手な行動をする人達が増えてきているのも事実です。

戦後教育の歪み、家長制度の廃止、都市化の進展、村落組織の崩壊等その要因はいろいろ考えられますが、本質的な原因として、物質的な豊かさだけを追求し、心の豊かさを重視しなかったつけが今になって回ってきた結果だと言えましょう。

いま一度亡くなっていった英霊達の声無き声に耳を傾け、彼らの熱い思いを胸に刻み、一人一人がこれから進むべき日本の方向性をあらためて見直すことが、今後ますます大切なこととなって行くでしょう。その声無き声を実感し、亡くなっていった英霊達の思いを顕彰していく場こそ靖國、護國神社だと言えます。

一人でも多くの方が靖國、護國神社へと参詣し、戦争で亡くなっていった人達の「おもい」を感じてもらうことを切に願います。

護國神社この一年

〔第四十二回秋季例大祭〕

平成十二年十月二十三日、第四十二回秋季例大祭が御遺族、崇敬者約千人の参列のもと厳粛に斎行された。定刻の午後一時、大祭開始を知らせる太鼓の合図とともに祭典が行われ、斎主又吉宮司の祝詞奏上に続き、大祭委員長代理大城英男氏、沖縄県遺族連合会会長座喜味和則氏がそれぞれ祭文を奏上した。また、MOA山月沖縄支部より献華が行われた。

祭典には、靖國神社宮司を始め神社本庁統理、山口県知事、全国都道府県遺族会々長ほか全国各地から慰霊電報及び祭詞が寄せられた。

「大祓式」・「除夜祭」・「歳旦祭」の斎行

平成十二年十二月三十一日から平成十三年一月一日にかけ、「大祓式」・「除夜祭」・「歳旦祭」が斎行され、新しい年に向けての祈願が行われた。

また、大晦日から元旦にかけ御社殿前に設けられた特設スタジオから民放ラジオの生放送が行われ、多くの参拝者で賑わった。

〔第四十三回春季例大祭〕

平成十三年四月二十三日、第四十三回「春季例大祭」が斎行された。「秋季」同様、約千人の遺族、崇敬者が参列し厳粛に祭祀が執り行われた。

祭典では、裏千家淡交会沖縄支部よりお茶の奉納が行われ、また航空自衛隊那覇基地太鼓部による奉納太鼓も行われた。

〔戦没者総合慰霊祭斎行〕

平成十三年六月二十三日（慰霊の日）、戦没者総合慰霊祭を斎行した。正午の時報に合わせて黙祷がささげられ、御遺族多数が列席する中、斎主又吉宮司のもと祭典が厳粛に執り行われた。

〔殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）斎行〕

平成十三年八月十五日正午より、神社、英霊にこたえる会沖縄県本部主催による「みたま祭り」が斎行された。正午の時報に合わせて黙祷がささげられ、斎主又吉宮司によって御遺族、各種団体崇敬者列席のもと祭典が厳粛に執り行われた。

《これからの予定》

- 平成十三年十月二十三日
  「第四十三回秋季例大祭」
- 平成十三年十一月十五日
  「七五三詣で」（十一月中受け付け）
- 平成十三年十一月二十三日
  「新嘗祭」
- 平成十三年十二月三十一日
  「大祓式」・「除夜祭」
- 平成十四年一月一日　「歳旦祭」
- 平成十四年一月三日　「元始祭」
- 平成十四年四月二十三日
  「第四十四回春季例大祭」
- 平成十四年六月二十三日
  「戦没者総合慰霊祭」
- 平成十四年八月十五日
  「殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）」

永代祭祀のご案内

当神社では、春・秋の例大祭を始め六月二十三日の戦没者総合慰霊祭、八月十五日の殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）等種々の祭典を御奉仕し、戦争によって散華されたみたまをお慰め申し上げております。

また、各々の戦没者の御命日には神前にて永代命日祭を斎行致しております。

この永代命日祭は、御遺族からのお申し出により斎行されるもので、当神社では、沖縄県出身の戦没軍人・軍属並びに一般住民を始め、沖縄戦にて散華された本土出身戦没者の御遺族方からの永代祭祀申込みを受け付けております。

永代祭申込み後は、御遺族へ前もって御案内申し上げ、命日に祝詞を奏上し、御祭神の慰霊安鎮と御遺族の御繁栄を祈念致します。（御参列が無くても慰霊祭は斎行致し、撤下のお供え物と御神札を郵送致します。）

なお、永代祭申込み初穂料は二万円以上となっております。詳しくは、当社社務所（電話〇九八―八五七―二七九八）までお問い合わせ下さい。

第1回「沖縄県立首里高等女学校」
―ずゐせん学徒隊―

特集　学徒達の沖縄戦

●学徒隊について

沖縄戦では正規の兵隊の他に「ひめゆり学徒隊」「鉄血勤皇隊」に代表される、下は十二～十三歳からなる旧制中学、師範、高等女学校在学中の男女学徒も動員され、最前線で通信、観測、看護等の任務につき、その多くが犠牲となった。

ここでは「学徒達の沖縄戦」と題して、各学校ごとに若くして散っていった男女学徒達の足跡をたどり、彼らがどのような「想い」をもって戦場へ赴き、どのような体験をしたのかをたどり、亡くなっていった学徒達に鎮魂の誠を捧げたい。

●沿　革

元は首里区立女子実業補習学校と呼ばれ、婚期前にある女子の教育と一般の技芸を授ける目的で明治三十年四月に設立された。昭和九年県立移管し、沖縄県立女子工芸学校と改称し、その後、昭和十八年に沖縄県立首里高等女学校となった。機織・裁縫・染色等の職業教育を中心とする学校で、女子実業教育、とくに伝統工芸の伝承に果たした役割は大きい。生徒は首里出身者中心で、卒業生は教職に就くものが多かった。校舎は、現在の那覇市首里桃原町にあったが、沖縄戦により焼失した。

沖縄県立首里高等女学校校舎

ずゐせん学徒隊

昭和二十年一月、上級生六十三名が看護教育を受け、さらに三月四日まで市内の山城病院で実習訓練が行なわれた。その後首里崎山町にある通称ナゲーラの第六十三師団野戦病院壕に移動し、三月二十七日壕内で卒業式を挙げ、卒業と同時に従軍看護婦として配属された。また、他の生徒も首里近郊の部隊や、浦添方面の部隊に配置された。

ナゲーラの壕内部

当初は入院患者も少なく、結核などの内科患者であった。しかし、米軍上陸後本格的な戦闘が開始されると、前線から次々と運ばれてくる負傷兵を昼夜問わず看護しつづけ、自らも極度の疲労と緊張のなか、アメーバ赤痢等に感染し衰弱していった。しかし、病気から回復すると再び任務に戻っていった。

病院内での彼女等の主な役割は、手術時のローソク持ち、軍医の汗ふき、そして、切断された手足を壕の外へ運び処理すること。また、看護補助として、負傷兵の包帯交換、尿の処理、食事の世話等であった。

中でも、壕外への食事の受け取りと、水汲みは命懸けの作業で運搬中に被弾し死傷するケースも多かった。

また、後方へと搬送されてきた患者の収容にも従事し、砲弾が飛び交うなか、負傷者が乗った重い担架を、四人の女子の細い手で本部へと運んでいった。

「患者収容に出ていく友達を、どう

ぞ無事で帰るようにと見送りました。帰ってきてくれるとほんとうにうれしくて、抱き合って喜びました。」（註一）と当時の様子が記録されている。

学徒隊の一部は浦添の最前線にある野戦病院分室へも派遣され、そこで患者収容に出た学徒一名が戦死した。それは、沖縄の女子学徒の最初の戦死者でもあった。

五月に入ると戦況も逼迫し、首里の病院壕から市内繁多川の壕へ移動。それに伴い学徒達も砲弾の犠牲となり、次々と戦死していった。

そして、さらに部隊は兼城村武富（現在糸満市）、米須（糸満市）、伊原（糸満市）の壕へと移動を続け、六月十九日の解散命令によって壕を出て本島北部を目指した。だが、ほとんどが敵弾に斃れ、また自決して最期を遂げた。

彼女たちは、血と膿と汗の臭気がたちこめる壕の中で、最後まで負傷者たちの包帯の交換や尿と便の世話をし続けた。幾度も吐きそうになりながら、涙をいっぱいためながら、国そして生まれ育った郷土を守るため、そのつらい仕事に耐えたのであった。

従軍した生徒六十一名（註二）中三十三名が戦死し、他にも職員十四名、同窓生四十九名が散華し現在糸満市米須の「ずゐせんの塔」にその御霊が祀られている。

註一―『首里高女の乙女たち』、著者：瑞泉同窓会　発行：平成三年五月十五日

註二―看護教育を受けた学徒六十三名中二名は、体調不良等の理由により参加出来なかった。

くやみのことば

ずゐせん同窓会四十一期生
上原　艶子

首里高女で、看護教育を受けたのは六十三名で、その中、体を悪くしたり、家族の事情で参加できなくなった計二名が帰されて、正式に入隊したのは六十一名でその中の三十三名の方々が戦死されました。他にも多くの職員の方々、同窓生の方々が沖縄戦にて亡くなられました。その御霊をお慰めしようと昭和二十三年八月、那覇市首里桃原町の新校舎跡のグランドに「ずゐせんの塔」が建立されました。塔身には首里城内の旧校舎跡の石が使われました。それから後は毎年六月の慰霊の日にはそのグランドの丘の上に集まって、松の木の下で亡き皆様方の面影を忍びつつ、何時も快活で上品な言葉使

い、挨拶が上手で、清潔で人なつっこいと誉められていたあの頃の思い出を語りあった事が瞼に浮かびます。それから二十年以上の間毎年慰霊祭がとり行われましたが、あの輝かしい伝統のある学び舎からは、決して増加することのない瑞泉同窓生の数を思うとき一抹の淋しさを禁じ得ません。又、新校舎のあったあの敷地は既に人家が密集し、これ以上この地に鎮座申し上げるのにふさわしくないので、急遽「ずゐせんの塔」は桃原町から慰霊の塔の密集する島尻の米須の地に移すことになりました。昭和四十七年一月十日、此の地に移転出来ました。平成七年六月二十二日の五十年祭の前日には、ここが永久の御霊の安住の地となりますように、又この塔を依り所にされて神鎮まりますよう、心の底から祈らせて頂きました。又亡くなられた山城キクさんの御両親で山城加那さん、ヨシさんのお二方には畠への行き帰りに、「ずゐせんの塔」の周囲を清掃し草をむしって、娘達の「御霊よ安かれ」とその眠りを守って下さいました。それから後になって、学徒看護隊「瑞泉隊」の名を永久に祭り奉りたく平成元年十月二十一日永代供養へと取り計られ、沖縄県戦没者慰霊奉賛会に入会して居ります。

太平洋戦争最大の地上戦で味わったさまざまな体験や、又平和が如何に尊いかを示された皆さま方の心情を思い又、青春を謳歌することなく無念の思いで身を捧げていった学友の皆さま方を思い、散りにし友、平和の女神への報恩感謝の誠を捧げ平和創造の尊い仕事に励みたいと思います。今、基地の中に沖縄があるという表現で未だに真の平和な社会とは程遠い現況下、「今、何を成すべきか」を問われて居ります。西暦二千年のサミットも誘致され、又ガイドラインで何が変わるのか?と心に問いましたが、すでにその事は始動し始めて居ります。戦後も五十六年、沖縄は来年五月十五日で「本土復帰三十年」となり、さまざまな思いが交錯する日々であります。人々の心情は基地存続と生活不安とやり場のない失望感で混迷した姿となっていますが、無から出発して半世紀、新しい風が南の島から世界に吹き始めています。先人達が残してくれた亜熱帯の自然風土と独自の文化を根幹にした新たな胎動を漲ぎらしていきたいと思います。私達は碑に刻まれた亡き数に入る方々のお名前を読み瞑目合掌し御冥福を心からお祈り申しあげます。

来てみれば――

来てみれば　いとぞ悲しき
摩文仁岳　くずれし岩影
されどいとしの乙女らは
名のみ残すかずゐせんの塔

平成十二年度永代祭申込者御芳名

新規永代祭申込み者

・滋賀県東浅井郡　清水益栄様
・滋賀県栗太郡栗東町　村上カヨ様
・埼玉県春日部市　高橋忠子様
・広島県大竹市　平池チヨ子様
・広島県大竹市　松本春高様
・沖縄県石垣市　瀬名波　初様
・大阪府高規市　田中武国様
・三重県尾鷲市　平井善夫様
・北海道川上郡　小野瀬雅子様
・徳島県阿南市　幸田かね様
・北海道函館市　高田トシ様
・北海道札幌市西区
・岐阜県岐阜市
・三重県南牟婁郡御浜町
・愛知県西春日井郡
・岩手県盛岡市
・岩手県花巻市
・山口県宇部市
・奈良県天理市
・山梨県甲府市
・福岡県大牟田市
・北海道札幌市清田区
・北海道札幌市西区
・北海道
・北海道
・福岡県春日市
・大分県玖珠郡玖珠町
・北海道松前郡
・愛知県岡崎市
・沖縄県那覇市
・熊本県山鹿市
・東京都八王子市
・神奈川県藤沢市
・神奈川県横浜市神奈川区
・愛知県豊橋市
・佐賀県三養基郡中原町
・石川県小松市
・茨城県取手市
・北海道札幌市中区
・神奈川県横浜市
・沖縄県那覇市
・奈良県生駒市
・北海道根室市
・滋賀県栗太郡栗東町
・福島県二本松市
・愛知県稲沢市
・北海道苫前郡苫前町
・北海道札幌市北区
・山口県宇部市
・岡山県津山市
・静岡県藤枝市
・熊本県熊本市
・広島県広島市安佐南区
・愛媛県松山市
・東京都中野区
・宮城県黒川郡富谷町
・京都府八幡市
・愛知県豊橋市
・北海道札幌市東区
・福岡県柳川市
・愛知県岡崎市
・東京都江戸川区
・岐阜県恵那郡福岡町
・愛知県海部郡大治町
・北海道河西郡茅室町
・神奈川県横浜市南区
・北海道網走郡
・東京都荒川区
・鹿児島県姶良郡
・和歌山県那賀郡町田東
・千葉県市川市

荒川嘉子様　荒川文子様
松波一男様　松原マツ様
東すゑの様　堀池四郎様
高柳潔子様　安田信吉様
瀬川　淳様　川口日出様
瀬川タエ様　土田千代様
上田　喬様　北村たか子様
切田京子様　平原清恵様
佐藤ひでの様　石川美芳様
小柳昌敏様　西澤功子様
絹川チヨ様　松尾雪子様
浅田興屋様　児玉光晴様
有馬幸子様　梅田光枝様
丹野桂子様　佐々木禎助様
大橋温子様　菅原秀子様
中島美千代様　斉藤金蔵様
戸田　愛様　牧　清様
加藤志づ様　鳴海美栄子様
饒平名幸子様　中川小夜子様
岡部ハツ子様　内藤はる子様
石上順子様　岡田眞一様
辻　功様　岡山孝平様
松本敬子様　気田くわ様
小野すみゑ様　森　正子様
立石博義様　高津菊枝様
南出春子様　成田静子様
大塚幸男様　川俣トク様
鈴木名香子様　黒木正敬様
山本太一郎様　藤川嘉寿子様
仲村致慶様　松永修巳様

命日祭御供奉納者芳名（重複掲載有り）

・滋賀県甲賀郡水口町　宿谷長次様
・愛知県一宮市　原　江つ様
・北海道古宇郡泊村　澤田政枝様
・北海道札幌市東区　鳴海美栄子様
・北海道札幌市西区　桜井朋子様
・愛知県海部郡　石垣治三様
・三重県志摩郡　杉本茂樹様
・佐賀県伊万里市　條島源吾様
・北海道茅部郡茅部町　佐藤武次郎様
・愛知県南設楽郡　石野忠雄様
・三重県津市　吉川つや様
・千葉県千葉市若葉区　布施　茂様
・北海道函館市　伊藤和子様
・神奈川県横浜市南区　高津菊枝様
・千葉県市川市　飯塚いそ様
・北海道川上郡剣淵町　阿部辰巳様
・北海道札幌市西区　植松　香様
・大阪府堺市　恵　親也様
・沖縄県那覇市　与那嶺文子様
・愛知県稲沢市　下田方子様
・福井県福井市　野阪重信様
・岡山県岡山市　羽布津麗子様
・北海道北見市　十良沢義治様
・沖縄県北谷町　伊禮和枝様
・愛知県津島市　加藤恵一様
・北海道　浅野静子様
・北海道札幌市東区　加藤　勤様
・沖縄県浦添市　濱松　昭様
・愛知県名古屋市天白区　近藤義文様
・沖縄県宜野湾市　宮城永都子様
・佐賀県小城郡　藤島濤子様
・沖縄県那覇市　川田江勇様
・沖縄県浦添市　上原艶子様
・沖縄県那覇市　安里積貞様
・群馬県高崎市　深町フジノ様
・沖縄県那覇市　森田孝秋様
・沖縄県南風原町　宮良慎次様
・沖縄県浦添市　濱松　昭様
・熊本県熊本市　松尾雪子様
・兵庫県三原郡　真野克之様
・愛知県小牧市　橋本かや様
・沖縄県那覇市　仲村致慶様
・岡山県岡山市　羽布津麗子様
・沖縄県那覇市　高江洲愛子様
・愛知県刈谷市　丹村きり様
・佐賀県杵島郡江北町　千綿ミエ様
・沖縄県那覇市　高江洲愛子様
・群馬県勢多郡大胡町　江原ハツ様
・石川県江沼郡　石田芳枝様
・岡山県久米郡　布野芳子様
・千葉県市川市　岩沢かね様
・福岡市　秋満純一様
・北海道札幌市　河野敏子様
・千葉県鎌ヶ谷市　中村　清様
・東京都武蔵村村山市　渡辺三郎様
・北海道十勝郡　松田博子様
・北海道十勝郡　背戸田登様
・北海道十勝郡　前谷一雄様
・静岡県焼津市　松田まさ様
・北海道札幌市東区　鳴海美栄子様
・北海道札幌市中央区　黒川善一様
・北海道北広島市　仙北谷ミネ様
・北海道余市町　木村シズ子様
・佐賀県佐賀市　池田アサエ様
・山口県宇部市　平原清恵様
・北海道足寄郡足寄町　大竹口重幸様
・沖縄県那覇市　屋良朝正様
・福島県いわき市　渡辺勝美様
・愛知県一宮市　原　江つ様
・滋賀県　大辻誠吾様
・京都府京都市　萬木　正様
・岩手県岩泉町　長谷川孝一様
・岩手県岩泉町　佐々木フエ様
・岩手県岩泉町　茅　克之様
・岩手県岩泉町　小笠原スミ様
・岩手県二戸市　立花ヨネ様
・岩手県盛岡市　奥　様他二名
・北海道苫小牧市　坂牛由喜子様
・広島県呉市　鈴木鬼市様
・広島県呉市　渡部妙子様
・福島県喜多方市　山岡美知子様
・静岡県島田市　田中昭二様
・北海道砂川市　紀林玲子様
・北海道帯広市　安田文蔵様
・岐阜県　荒井ヨネ様
・岐阜県岐阜市　簿浦かと様
・岐阜県岐阜市　塚本坂枝様
・高知県南国市　岡田きよ子様
・石川県金沢市　島村初喜様
・神奈川県横浜市　四月朔日秀一様
・北海道札幌市　山本太一郎様
東前　薫様

今に残る激戦の跡

「浦添市浦添城跡」

那覇市の北側に隣接する浦添市は、沖縄本島中部と南部とを結ぶ要所として栄え、沖縄戦当時は、南下する米軍と第三十二軍沖縄守備隊との間で激しい攻防戦が繰り広げられた地である。なかでも市内西部に位置する浦添城跡

前田陣地付近から首里方向を望む（中央の白い部分が首里城）

丘陵に構築された前田陣地は、司令部壕がある首里から直線にして三キロの距離にあり、第二防衛線の要として戦時には十一回も取ったり取られたりの攻防戦が繰り広げられた場所である。

持久作戦をとる我が守備隊は、第一防衛線である牧港・嘉数・我如古・和宇慶を結ぶラインを死守し勇猛果敢に奮戦していた。しかし、海空からの支援のもと、豊富な物量によって侵攻してくる米軍に対し、ついに四月二十三日、第三十二軍司令部は第二防衛線へ前線を整理することを決定した。

この第二防衛線は、城間、屋富祖、伊祖、仲間、前田、幸地、小波津、小那覇を結ぶ線で構成され、前田以西を米軍上陸に備え島尻地域に配置し

ていた第二十四師団（雨宮巽中将山梨県出身）が担任することとなった。

この第二十四師団は、昭和十四年ハルピンで編成されたもので、大部分が現役兵で精鋭師団とされていた。

四月二十五日、米軍は侵攻の準備として仲間、前田の高地に猛砲撃を加え、飛行機によるナパーム爆弾攻撃を行った。

翌二十六日午前六時ごろから米軍は猛烈な砲撃を仲間、前田、幸地地区に集中させ、午前十時ごろ歩兵による攻撃が開始された。仲間、前田の高地帯においては、接戦となり頂上付近の争奪が繰り返された。米国陸軍省編纂資料によると、「ニードル・ロック（頂上付近にある巨岩で、為朝岩と呼ばれている）のF中隊は、人間はしごを作って丘陵のいただきに登ろうとした

為朝岩全景（東側から撮影）

が、最初の三名が頂上に達するやいなや、一回で機関銃弾にあたって戦死した。―中略―E中隊は一五〇高地の南にある前田の小高い丘をとろうとした。だが、兵が丘の上に立つと同時に、丘の上は十丁あまりの日本軍機関銃掃射をうけ、たちまちにして二名が戦死、六名が負傷するという事態が発生した」とあるように、「前田高地での日本軍防御戦術は、完璧そのものだった。丘の前面はまもらず、相手を容易に登らせ、頂上までのぼりつめたところで猛烈な攻撃をあびせる。」という戦法がとられ、米軍に甚大な損害を与えたのであった。正午から米軍は戦車を伴い侵攻し、前田東方高地が占領されたが、第二十四師団は、第一防衛線を死守してきた第六十二師団（藤岡武雄中将）と共に善戦し、高地中央部分の頂上は守られた。一方同じ第二防衛線である幸地、小波津地区も米軍の攻撃を受け、第二十四師団歩兵第二十二連隊第一大隊長鶴屋義則少佐（五十二期）が艦砲の直撃をうけ戦死するなど甚大な被害を生じたが、これも死守しつづけた。しかし城間陣地は米軍の包囲攻撃を受け、陣地大部分が占領された。

第三十二軍牛島司令官は、前田高地が突破されたら首里陣地に敵が迫ってくるのは時間の問題として、前田陣地の死守を命じ、第二十四師団、第六十二師団は共同して戦闘を続けた。それを受け、第二十四師団長は二十七日、歩兵第三十二連隊長（北郷格郎大佐）に前田東方高地の奪回を命じ、同連隊第二大隊（志村大隊）は二十八日夜、前田高地に到着。先に同高地を死守している独立歩兵第十二大隊（賀谷大隊）と合流した。

前田陣地は以後も、陣地周辺地域を占領し戦車を伴いながら攻撃を続ける米軍に対し、多くの死傷者を出しなが

らも頂上及び南斜面を確保し、米軍にも相当の損害を与えた。しかし、前田東方高地の奪回は果たせなかった。

前出米軍資料によると、「四月二十九日に前線交替をするまでに、第三八一連隊は戦闘能力四〇パーセントに激減、損害じつに一千二十一名にのぼった。また、小隊の中にはわずか五名ないし六名しか残らないところもあった。」と記録されている。

また、この戦闘では一回の戦闘が三十六時間続いたものや、当時日本軍がとった“バンザイ突撃”と言われる、自ら敵陣に突進し我が身もろとも爆破する行動をとった米軍兵士がいたことも記録されている。

このような熾烈極まる「ありったけの地獄を一つにまとめた」戦闘は五月に入ってからも続き、「米軍の砲迫の集中火を受ける間は壕内に待機し、米軍兵士が頂上付近に現れると壕から出て反撃するという状況が繰り返された。」

五月四日、沖縄守備隊は全部隊を挙げて、これまでの守り重視の姿勢から総攻撃に移り、一気に戦況を挽回しようと試みた。しかし、そのほとんどが失敗に終わり、かえって兵力を消費するにとどまり、徐々に敵の包囲網が狭まっていった。

前田高地の南斜面及び洞窟を保持する守備隊も、五日、米軍の包囲攻撃を受け洞窟内に閉じこめられる状態となった。

その後徐々に前進する米軍は、前田高地を越え、さらに首里へと進み、高地洞窟に立てこもる守備隊は孤立状態となっていった。それでも、守備隊は攻撃する米軍に対し勇戦し続けた。

五月九日、ついに第六十二師団は前田高地を放棄することを決定。十日未明、独立歩兵第十二大隊（賀谷大隊）と独立歩兵第十四大隊の主力は洞窟を脱出した。しかし、米軍に撤退を察知され、賀谷大隊は機関銃の集中火を受け多大な損害を受けた。そのため、志村大隊は脱出を中止、連隊との連絡は途絶えた。

その後、次々と防衛線が突破され、第三十二軍は戦力の低下の程度から組織的戦闘は無理と判断し、五月二十八日首里を放棄し、本島南部摩文仁へ軍司令部を移し奮戦したが、六月二十二日夜半、藤岡第六十二師団長は中島第六十三旅団長ほかと共に摩文仁高地にて自決。続く六月二十三日未明、牛島軍司令官、長参謀長が自刀。そして三十日、雨宮第二十四師団長も参謀と共に自決した。

浦添城跡展望台近くに残る壕入口

連隊旗を奉焼した司令部壕内（軍靴のかかと部分が残っている）

なお、歩兵第三十二連隊長北郷格郎大佐は、本島南部真栄里の壕に司令部を置き、なおも勇戦を続けたが、八月二十八日壕内で連隊旗を奉焼し、二十九日連隊長以下武装解除を受けた。

また、脱出を中止し前田高地にとどまった志村大隊は、五月末まで高地の洞窟に止まり、南部から脱出してきた将兵と共に四キロ東方の南上原へ移動し、九月初旬まで戦闘を続け、同連隊第一大隊長伊東孝一大尉の勧告により、全員収容された。

この前田高地での戦闘では、日米両軍ともに多大な犠牲を払ったのみならず、地域住人の犠牲者も多く、集落住民の戦死者率は五九・七パーセントにものぼっていることも忘れてはならない。

注―「」内は、『日米最後の戦闘』一九六八年。米国陸軍省編、外間正四郎訳から引用した。

うむい掲示板

●参拝者用トイレの改修

護國神社では、参拝者用のトイレを従来の和式便器から洋式便器へと取り替えた。これは、「参拝したいが、用足しに不安」との声が年々増え、御遺族の方々が、少しでも安心して参拝できるようにと、トイレの全ての便器を足腰の弱い高齢者に配慮したものへと変更したもので、工事終了後「参拝時の用足しが楽になった」との声をいただいた。しかし、スペースの問題等により、今回の改修では車イス用のトイレは設置できず、これは五年後に造営が計画されている新参集殿へと引き継がれた。

●鳥居の補修

神社の正面玄関とも言える、国道側の大鳥居上部及び、柱の一部にはく離が確認されたため、全面補修工事が行なわれた。工事は、はく離がはげしい鳥居上部に樹脂製素材が組み込まれ、柱部分には接着剤が注入されるかたちで行なわれ、それによって、安心して鳥居をくぐることが出来るようになった。

●社号碑、燈籠一対の奉納

平成十二年十月五日、亜細亜スピリチュアル民族会議（代表多田容幸様）により社号碑・燈籠一対が奉納され、同日関係者約三〇〇名が参列し、奉納除幕式並びに奉告祭が斎行された。これは、亜細亜スピリチュアル民族会議の前身である日本民主同志会によって昭和二十三年から、平成元年までに実施された九〇回にもわたる「沖縄慰霊渡行」を継承し、平成三年から毎年実行されていた「日本の霊地・沖縄の旅」が、今回十回目となり、合計百回目の満願達成を記念して行われたもの。神社下段階段横には総御影石造りの立派な社号碑が建立され、そして境内中段には、奉納者名が刻まれた燈籠一対が建立され同会の御芳志が記された。また同日、日本民主同志会代表松本明重氏建立の歌碑横に、満願成就の献辞の碑も建立された。

戦友、遺族からの手紙

〈遺族より〉

今年も早や四月となり伊万里の里も桜の花が咲く頃となりました。命日祭のお知らせをいただきありがとうございます。亦、先般は「うむい」をお送り下さいまして沖縄戦の様子などいろいろわかり地上戦がいかに悲惨なものかわかります。私もスマトラ島、パレンバン上陸作戦に参加して、今も思いが消えません。

新平儀人傅によりますと、平山隊と司令部との通信連絡中、砲撃により戦死とのこと。四月二十九日富城宜（編者註「東風平町富盛か」）にて官通報は「昭和二十年四月二十九日南西諸島方面にて戦死す」と連絡がありました。

在沖縄昭和十九年七月より二十年四月二十九日。在職中は地区の皆様にはお世話になり「学校の先生に特にお世話になった由」ありがとうございました。奉仕神職様の御健勝をお祈り申し上げます。

佐賀県伊万里市黒川町大黒川奥野
兄　條島　源吾
條島　新平　命
昭和二十年四月二十九日命日

拝啓

始めてお便りさせて頂きます。私は石部隊遺族の鈩と申します。

昨年度暮うむいの創刊号を送って頂き早速送金してお願い申し上げ様と思いましたが、沖縄へ十一回も参拝させて頂き乍ら沖縄の護国神社へ一度もお詣りしないなんてもっての外福井の護国神社へは年四回お詣りさせて頂きます。本日十三日春の大祭にお詣りして来ました。昨年暮より少し身体の具合が疼く風邪を引いて五十日余りやっと本日お参りも出来て喜んでおります。

昨年五月二日よりもう最後だと思いお詣りして帰りました。うむいを送って頂きもう一度沖縄へ行き御本家の護国神社へお詣りしなければ死んでも死に切れないと思い私が死んでも何時迄も弟を守って頂きたく平良一男先生や戦友に御連絡申して来る五月二日出発する予定をしております。二日に到着しましたら直ぐに御参拝したいと思います。よろしくお願い申し上げます。うむいの御礼も申し上げず御参拝の折御礼申し上げたくお返信も申し上げずお許し下さい。二日に御参拝申し後々の事をお願い申し上げたくよろしくお願い致します。

四月二十九日には愛知県の三ヶ山へ二十一大隊の慰霊祭にお詣りして帰って直ぐに沖縄へ出発と一寸忙しいですが参拝出来ることを楽しみにしています。私も満八十二才になりました。本当に最後になろうと思います。お目もじの上でよろしくお願い申します。

かしこ

平成十三年四月十三日
福井県三国町　鈩　文子
沖縄県護国神社社務所御中

〈戦友より〉

前略御免下さい

本年も慰霊の日が間近に成りました。沖縄戦の戦友と県民の犠牲者に対し深く心から冥福を祈ります。

私は旧石部隊の一員です。北支戦地に五年兵として勤務していましたが、私より一年以下の現役兵達は沖縄へ残余は北支に留まり警備に終戦後同中隊の山本義中氏（東京都在住）の誘いに再三部隊慰霊祭に参加又彼から戦況等を聞き、県民の皆様達の御苦労に只だ頭が下がる思いです。多少ですが慰霊の日に灯明の一本でもと同封します。

最後に県民皆様達の御多幸と御健勝をお祈り申し上げます。

合　掌

五月十五日
天理市櫟本町
奥田　義次拝
沖縄護国神社様

社務日誌抄（平成十二年九月より平成十三年八月まで）

九月

・二日　台湾高雄市保安堂一行正式参拝
・六日　靖国神社禰宜小田欣一様正式参拝
・一六日　皇學館大學本澤雅史助教授正式参拝
・二三日　修養団捧誠会神石祭
・三〇日　知念村戦没者慰霊祭参列並びに奉仕

十月

・五日　社号碑、燈籠一対除幕式並びに奉納奉告祭
・七日　那覇まつり成功安全祈願祭
・一七日　神宮神嘗祭
・一九日　岩手県遺族連合会正式参拝
・二二日　群馬県遺族の会正式参拝
・二二日　宵宮祭、霊璽簿奉安祭
・二三日　第四十二回秋季例大祭
・二六日　東京都遺族連合会正式参拝
・三〇日　広島県遺族会正式参拝

十一月

・一日　岡山県遺族連盟正式参拝
・三日　明治祭
・四日　因伯の塔慰霊祭奉仕
・五日　山口県遺族連盟正式参拝
・六日　福島県遺族会正式参拝
・七日　福島の塔慰霊祭奉仕
・七日　静岡県遺族会正式参拝
・八日　山梨県遺族会正式参拝
・九日　徳島県遺族会正式参拝
・九日　熊本県遺族連合会正式参拝
・一〇日　産業まつり成功祈願祭
・一〇日　長崎県遺族連合会正式参拝
・一〇日　北海道遺族連合会正式参拝
・一二日　三重県遺族会正式参拝
・一三日　青森県遺族連合会正式参拝
・一五日　富山県遺族会正式参拝
・一五日　奈良県遺族会正式参拝
・一五日　岐阜県遺族会正式参拝
・一六日　福井県遺族連合会正式参拝
・一六日　高知県遺族会正式参拝
・一七日　土佐の塔慰霊祭奉仕
・一八日　新潟新樹会　須永宏様正式参拝
・二〇日　茨城県石井市遺族会正式参拝
・二〇日　茨城県遺族連合会正式参拝
・二〇日　和歌山県遺族連合会正式参拝
・二〇日　茨城の塔慰霊祭奉仕
・二三日　新嘗祭
・二五日　神奈川県遺族会正式参拝
・二六日　埼玉の塔管理委員会正式参拝
・二七日　佐賀県遺族会正式参拝
・二七日　佐賀県護国神社宮田宮司、同社責任役員深町哲郎様正式参拝

十二月

・五日　豊見城地域交通安全協会交通安全祈願祭
・七日　千葉県遺族会正式参拝
・二三日　天長祭
・二六日　神符守札遷霊祭
・三一日　大祓式・除夜祭

一月

・一日　歳旦祭
・三日　元始祭
・一六日　福島市遺族会正式参拝

二月

・三日　節分祭
・三日　航空自衛隊那覇基地救難隊
・五日　太鼓部新年奉納太鼓
・一一日　京都の塔奉賛会正式参拝
紀元祭
・一二日　日本青年遺骨収集正式参拝
・一三日　山形県神社庁正式参拝
・一五日　札幌遺族会正式参拝
・一七日　祈年祭
・一八日　修養団正式参拝

三月

・四日　久士十一期海上挺身鎮魂碑慰霊祭奉仕
・六日　北海道沖縄会正式参拝
・一六日　政治結社正気塾正式参拝

四月

・二二日　霊璽簿奉安祭・宵宮祭
・二三日　第四十三回春季例大祭斎行
・二九日　昭和祭

五月

・一三日　靖国神社禰宜山口建史様正式参拝
・一五日　祖国復帰記念祭
・二八日　滋賀県遺族会正式参拝

六月

・一三日　いわお戦友会慰霊祭奉仕
・一六日　香淳皇后一周年祭遥拝式
・一七日　臨時大祓式
・一七日　しづたまの碑慰霊祭奉仕
・二二日　千葉県遺族会壮年部正式参拝
・二二日　沖縄県遺族連合会壮年部正式参拝
・二三日　沖縄戦戦没者総合慰霊祭斎行
・三〇日　大祓式

七月

・一〇日　内着帯式

八月

・一五日　殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）斎行
・一七日　群馬県遺族の会青少年正式参拝
・一八日　高知県遺族会青少年正式参拝
青年ふるさとエイサー祭り
成功安全祈願祭

写真で見る護國神社この一年

正月時に授与される「福笹」に短冊を結ぶ助勤の巫女達

1月1日午前零時、御神酒開きが行われ参拝者に授与された

大晦日に行われた弦楽四重奏の一場面

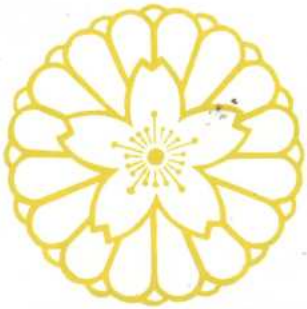
6月17日糸満市摩文仁「しずたまの碑」慰霊祭

8月15日孫とともに参拝する御遺族

編集後記

・沖縄県護國神社社報「うむい」第二号をお届け致します。

・「うむい」創刊号への御意見、御感想を多数いただき誠にありがとうございました。皆様方からの御意見を受け、第二号から戦争がいかに悲惨なものであるかを少しでも多くの方々に解ってもらうべく、特集「学徒達の沖縄戦」と題し、戦場で散っていった学徒達を取り上げることとなりました。

・本年度より、「護國神社新参集殿」造営に向けての基金募集が開始されます。経済情勢厳しきなか、誠に恐縮ではございますが、皆様方からの御支援よろしくお願い申し上げます。

発　行　平成十三年十月一日
発行所　沖縄県護國神社
〒九〇〇―〇〇二六
沖縄県那覇市奥武山町四四番地
TEL〇九八―八五七―二七九八
FAX〇九八―八五七―七九一七
編集担当　加治　順人
印刷所　㈲うるま印刷